

境内に実る豊富な果実

日本寺駐在僧 中野蓮音

4月から7月初めにかけて、インドは一年で最も暑い季節を迎えます。ここ日本寺でも朝から何もしていなくても汗が湧き出てくるような日々が続いております。しかし、太陽の光をたっぷりと受けるこの時期は、果物や植物が大きく成長する季節でもあります。

日本寺の広い境内には、さまざまな自然があふれています。今回はその一部をご紹介します。

◇マンゴー◇

インドは世界最大のマンゴー生産国です。日本寺の境内にも大きなマンゴーの木が二本あり、小さなものを含めると十本以上が植えられています。



たわわに実るマンゴー

この時期、インドでマンゴーの木の下に立っていると、思わぬ方向から石が飛んでくるかもしれません。お寺近くの村の子どもたちは、マンゴーを取ることに夢中で、日本寺の塀の外からも、実を落とそうと石を投げてくることがあります。

きちんと「マンゴーをください」と声をかけられる子どもたちには、駐在僧も喜んで分けてあげのですが、こっそり石を投げて取ろうとする子どもたちには、しっかり注意するようにしています。

インドでは、マンゴーを熟す前の緑色のまま食べることもよくあります。切って塩やスパイスを付けて食べたり、アチャール（漬物）にしたりします。日本寺のインド人スタッフによると、「誰かに取られる前に収穫する」ということもあるそうですが、基本的には青いマンゴーそのものが好まれているようです。



子供たちが投げた石



緑マンゴー

◇ジャムン (Jamun)◇

ジャムンはインドの夏を代表する果物の一つです。日本寺本堂の横に大きなジャムンの木が一本あります。日本ではほとんど見かけない果物で、私もインドに来て初めて知りました。

見た目はブドウに似ていますが、味には独特の渋みがあります。6月から7月にかけて、緑色だった

実がブドウのような濃い紫色へと変わっていきます。個人的には、アメリカンチェリーに渋みを加えたような味に感じました。

マンゴーと同じく、この時期になるとジャムンを求めて境内には多くの村の人々が集まってきます。大きな袋を持って落ちた実を拾う人、木の下で大きな布を広げ、肩車をしながら木を揺らして実を落とす家族など、その様子はとても賑やかです。



ジャムンを協力して取るスタッフ

日本寺のスタッフも昼休みに皆で協力しながらジャムンを収穫していました。

そのほかにも、日本寺の境内にはたくさんの自然があふれています。どの植物も、インドの暑い夏を彩ってくれる大切な存在です。



ジャムン（個人的には好きです） バケツいっぱい収穫

毎日「暑い、暑い」と言っておりますが、植物たちにとっては、しっかりと甘い実や種子をつけ、それを動物たちに運んでもらいながら命を次の世代へつないでいく大切な季節でもあります。

よく言われることではありますが、私たちはつい自分の立場や価値観から物事を見てしまいがちです。しかし、インドに来てからは、さまざまな視点から物事を見ることの大切さを改めて感じています。人にとっては厳しい暑さも、植物たちにとっては成長と実りの季節です。

まだまだ暑い日が続きますが、旬の植物や果物とともに、その季節ならではの恵みを感じながら日々を過ごしていきたいと思っております。

暑い時期ではありますが、ぜひ皆さまのお参りをお待ちしております。